

英語の現在分詞節の構造と派生 ー縮約関係節と分詞構文ー

長谷川 信子
(神田外語大学)

要旨

統語構造の基本は構造構築と構造標示「ラベル」であるが、その2つを異なるメカニズムとして分離させる方向性が理論構築の利点としてミニマリスト・プログラム（MP）で打ち出されている（Chomsky 2008, 2013）。Donati（2006）の自由関係節の分析は、そうした方向性の経験的利点である。本論文では、定形時制節や不定詞節に比べ、考察が遅れている分詞節を扱い、縮約関係節と分詞構文の構造と派生は、こうした方向の更なる経験的利点を示すと同時に、これらの構文の記述的特徴にも理論的な説明が与えられることを示す。統語理論上の高度に技術的な分析に立ち入ることはできないが、Cecchetto and Donati（2015）に言及し理論の方向性についても討議する。

キーワード：縮約関係節、分詞構文、標示（ラベル）、自由関係節、付加詞の認可

1. はじめに

本論文で扱うのは、(1)の斜字体下線で示した現在分詞を用いた表現の派生と構造である。

- (1) a. The woman entering the room is a spy.
- b. The woman entering the room, everyone turned around and took a glance at her.

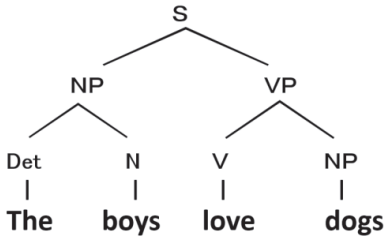
当該のthe woman entering the roomは表面的には同じような語の連なりとなっているが、文中での機能も意味も異なる。(1a)は、全体が名詞句で、意味的には、関係節を持つ名詞句 (the woman [who {is entering / has entered} the room]) とほぼ同義となる。(1b)はいわゆる分詞構文で、副詞節 ({As/When} the woman entered the room)での言い換えが可能である。こうした違いから、これらは(記述的な英文法でも生成文法でも) 各々異なる構文として扱われてきている。類似点は、単なる表面的な線的な単語の連なりに過ぎないとされてきた。

以下では、統語構造の構築と派生を、これまでとは異なる想定で考えるなら、こうした分詞表現の類似性を捉えることが可能となることを示す。先ず、第2節では、構造構築と派生について、従来(標準理論、原理とパラメーター (PP) 理論)の想定を概観し、その枠組みでの記述的問題を自由関係節に言及して指摘する。第3節では、最近のミニマリスト・プログラム (MP) での構造構築と標示についての理論上の新たな方向性が、自由関係節にこれまでの想定では許されなかった分析が可能となってきたことをみる。第4節では、その新たな方向性を受け、分詞節の特徴を整理した上で、(1)に提示した縮約関係節と分詞構文の分析を提示する。最後の第5節では、提示した分析が必然的にもたらず今後の理論上の課題を指摘する。

2. 構造構築と標示：Xバー理論の想定

言語は「音 (サイン)」を用いて「意味」を表現する体系である。「意味」には、単語の意味、意図した意味、言語表現には表れていない意味など様々だが、生成統語論は、「意味」を「出来事・事態を表す命題的な論理的意味」と捉え、それが表出する言語表現を「文」とし、それを生成するシステム・メカニズムの解明を目指す。そのシステムの基本は、文や句構築の基本要素としての語や形態素の「標示 (ラベル)」であり、文構造およびその部分を形成・派生する句の構築メカニズムである。例えば、単純な文 (S) The boys love dogs. を例に取れば、1960～70年代の生成文法初期の標準理論では、その構造は(2)のように分析し、この構造構築に必要な規則として、(3)のような句構造規則を想定した。

(2)



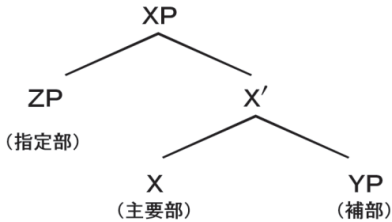
- (3) a. $S \rightarrow NP VP$
b. $VP \rightarrow V NP$
c. $NP \rightarrow (Det) N$

句構造規則(3)には、構造と標示を同時に用いて、どういう標示の要素がどのような標示の句(カタマリ)を形成するかが指示されている。こうした規則は、後(1980年代～2000年にかけて)の拡大標準理論、原理とパラメーター(PP)理論では、Xバー理論として、全ての文・句、全ての言語に共通するより抽象的な構造構築理論へと発展し、その基本的な構造のあり方は、大枠で現在も広く想定されている。

Xバー理論の基本は、概略(4)の特徴を持つ(5)のようなものである。

- (4) a. 構造形成の最も基本的な形は、2つの要素が併合(Merge)することから得られる「二股構造」である。
b. 構造形成物(統語構成物)には、その(標示を含む)性質・特徴を司る「主要部(X)」があり、その性質・特徴は、上位レベル((5)の X' , XP)に投射する。
c. 主要部(X)から句レベル(X' , XP)への投射において、 X' 内には補部が、 XP 内には指定部が生成でき、(5)で示す3層構造を成す。
d. 上記(4a-c)により、(5)の構造が構築される。 X は、主要部の範疇により、語彙範疇では、 V (動詞)、 N (名詞)、 A (形容詞) P (前置詞もしくは後置詞)、機能範疇では、 T (時制)、 C (補文表示)、 D (限定詞)などが標示(ラベル)となる。¹

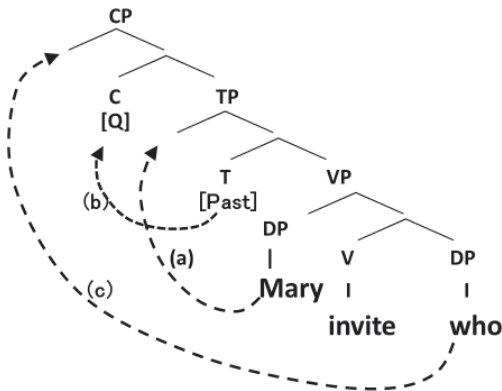
(5)



Xバー構造(5)は、個別の範疇や言語の違いを捨象し、言語構造のあり方を抽象化しているが、ここでも構造構築(4a-c)と構造標示(4d)は連動してしている。

さらに、Xバー構造(5)は構造生成の出発点（いわゆるD構造）だけに関わるのではなく、構造操作（移動）においても、移動の標的（Target）となる標示は、標的の主要部からの投射が踏襲されると想定され、遵守されきた。具体的には、例えば、英語の疑問詞疑問文 *Who did Mary invite?* は、(6)のような構造と派生となる。つまり、VP内主語MaryがTPの指定部へ（矢印(a)）、T要素[*Past*]がCの主要部へ（矢印(b)）、VP内のwh句（DP）*who*がCPの指定部へ（矢印(c)）、それぞれ移動するが、最初に構築された構造の主要部（V, T, C）と投射構造、および、その標示（VP, TP, CP）は踏襲されるのである。²

(6)



こうした「構造構築と標示」の同時的・一義的決定性は、「文」の構造と標示が「論理的意味」の基本となるとの想定を保証するメカニズムと考えられてきた。つまり、動詞 (V) の情報 (項構造) はVP内に表出し「出来事」を表し、出来事(VP)は時制と関わる機能範疇(TP)により選択され時間的解釈を獲得し、TP はより上位での機能 (従属節なら主節との関係、主節なら談話情報や情報構造との関係) をCPに選択されることで獲得する。(6)を例にとるなら、「Maryが誰かを招待する」(VP) という出来事が、過去の出来事であり (TP)、その出来事で欠けている「誰か」の値を発話の場で問う「主節疑問詞疑問文」(CP) としての意味・機能を持つのだが、それが、構造と標示から読み取れるわけである。

2.1 問題：派生と標示の曖昧性・二重性

上記で示したような構造・標示・派生のメカニズムが、生成文法の初期から踏襲されてきたのだが、それに対し、このシステムでは説明が難しい現象も指摘されてきた。例えば、Bresnan and Grimshaw (1978) で詳細に論じられた、疑問詞疑問文と名詞句 (自由関係節) の関係である。

- (7) a. I wonder [what Mary will recommend]. (間接疑問詞疑問文)
b. I will buy [what Mary will recommend]. (自由関係節)

(7)の埋め込み文 [what Mary will recommend] だが、(7a)では主節wonderの補文 (間接疑問文) として機能しており、基本的には(6)と同様の構造と派生・標示となる³。それに対し、(7b)では、この埋め込み文はbuyの目的語として機能していることから、全体はCP範疇ではなく、名詞句DP (もしくはNP) である。問題は、どうして、(7b)では、全体の標示がCPではなくDP (NP) となるのか、ということである。

従来のシステムでこの問題を解決するためには、埋め込み文の範疇が、元々生成段階で、CPとDP (NP) で異なり、(7b)の自由関係節の場合は、通常の関係節構造 (例えば、[the thing [which Mary will recommend]]) と同様の主名詞が関係節CPを持つDPの構造) を想定し、その主名詞部分が音形を持たない、もしくは、主名詞と関係代名詞が統合してwhatとして具現するといった分析

となる。しかし、そうした分析では記述はできても、そのような「空名詞」の存在やwhatとしての具現化の理論的整合性の解決がない限り、本質的な説明には至らない。

実は、本稿の冒頭の(1)の縮約関係節と分詞構文も、この(7)が示す問題と同じ課題を提示しており、従来の一義的な構造と派生・標示の想定では根本的な解決には至りそうもないのである。

次節では、理論内部の必然として、Xバー理論の想定とは異なる新たな理論的方向性が示されていることを指摘する。その方向性の経験的（記述的）利点として、(7)が提示する課題に新たな分析がDonati (2006) などで提示されていることを観察し、第4節で、その発展として(1)の分析を提示する。

3. 統語メカニズムの最小化：ミニマリスト・プログラム (MP)

3.1 構造構築と標示の分離

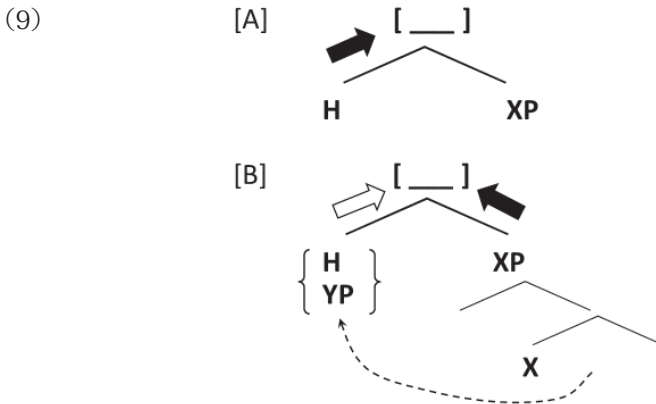
例文(7)で示したのは、従来のシステムでは把握が難しい現象に関わる問題だが、理論研究の醍醐味は、望ましい理論の方向性から、従来のシステムでは解決が難しかった現象への新たな分析の可能性が拓ける場合である。

MPが、第2節で示した従来の理論（標準理論、PP理論など）と理念的に大きく異なるのは、ヒトの認知（その中枢としての言語能力）発達の経緯を生物言語学的視点で俯瞰すると、言語に特化した「複雑な能力体系」を短期間で獲得したとは考えにくく、言語特有の認知システムはミニマム（限りなくゼロに近い）と想定すべき、との方向性である。⁴

当然、構造構築に特化したXバー理論（その具体的な手順としての(4)）も再検討の対象となり、構造構築に最低限必要な想定は(4a)の2つの要素の併合（Merge）による「二股構造」だけとする。そして、構造範疇の名称（標示・ラベル）については、(4b)(4c)のような構造構築と連動した主要部からの自動的な投射操作は想定せず、構造構築とは連動しないミニマムな「標示 Label」操作を提唱している。具体的な「標示」手順は、現在その整備が進行中だが、Xバー理論とは異なる(8)のような標示操作が提案されている。（Chomsky 2008, 2013；Cecchetto and Donati 2015, Tozawa 2015など参照）

- (8) 2つの要素 α と β が併合 (Merge) し、統語構成物 (Syntactic Object) $\{\alpha, \beta\}$ が形成されるが、その「標示 (Label)」は、併合要素の (i) α 、もしくは、(ii) β 、となる。⁵

この(8)のメカニズムがXバー操作(4)と、理念的に大きく異なるのは、併合する2つ要素のどちらの標示が上位に投射されるか、優劣をつけない点である。つまり、それだけ余分な想定をしないミニマルなメカニズムということになる。Xバー理論では、構造構築の最初から「主要部」が決められそれが投射され統語構成物の標示として生き残ることが理論の根幹だったのであるが(注2参照)、(8)では、併合される構成物は標的であれ併合要素であれ優劣なく、(8-i) (8-ii)として、どちらも構成物の標示となる可能性が許されるのである。これを図示すると(9)のようになる。⁶



Xバー理論では、2つの要素が併合した場合、[A] のように標的の主要部Hが構成物全体の「標示」となる。また、[B] のような、H (単体の単語) やYP (句) が、XP内部から移動しXPと併合した場合でも右矢印のように標的であるXPが投射することとなっている。しかし、(8)での想定では、そうした「黒塗り矢印」の投射に加え、[B] の「白抜き矢印」の投射 (つまり、移動してきた要素が標的XPを差し置いて新構成物の標示となること) が許されるのである。いや、むしろ、その可能性を抑制してきた(4)の条件の方が理論的には余剰 (ミニマ

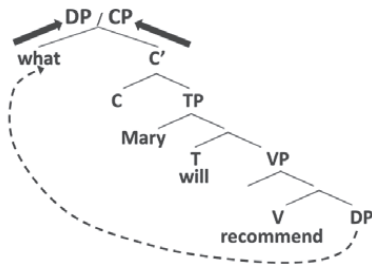
ルではない）とみなすわけである。

そして、こうした理論構築上のミニマルな想定から提示された「新たな可能性」は、記述的な利点として、2.1で指摘した(7)の現象に無理のない説明を加えられることがDonati (2006)、Chomsky (2008) で指摘され、(8)の方向性への経験的証拠として、注目を集めてきている。3.2節でそれを概観する。

3.2 自由関係節と間接疑問文の派生と標示

3.1 で提示された(8)と(9)の考え方から上記(7)の例を見てみよう。(7)の埋め込み部分 (what Mary will recommend) の構造が(10)である。

(10)



文として派生してきたCの投射に、whatが移動してくる時点で、(9)-[B]の標示操作の対象となる。移動元のC'が投射すれば（右矢印）CPの標示となり、移動要素のwhatの標示(D)が投射すれば（左矢印）DPとなる。前者が間接疑問文(7a)の補文、後者が(7b)の自由関係節として分析できるのである（Donati 2006を参照のこと）。構造構築（要素の併合：Merge）と標示（Label）操作を独立させ、各々をミニマルな理論的想定で機能させることで、従来の構造構築操作では想定していなかった「構造構築の曖昧性」「1つの移動から2つの異なる統語構成物の派生」が許されることとなった。この曖昧性により、これまで全く異なる構文とされて、異なる構造、派生、標示により分析されてきたものに、新たな分析が可能となったわけである。⁷この方向性で、次節では、冒頭で示した現在分詞に関わる構文、縮約関係節と分詞構文を考察する。

4. 現在分詞節の構造と派生

冒頭で提示した分詞節構文(1)を(11)に採録する。(11a)は縮約関係節、(11b)は分詞構文である。

- (11) a. *The woman entering the room* is a spy.
b. *The woman entering the room*, everyone turned around and took a glance at her.

本節では、これらも、(7)の例((10)の分析)と同様に、(9)-[B]に示した投射する標示の曖昧性の観点から分析できることを示す。しかし、その前に、分詞節の性質を明らかにしておきたい。その上で、縮約関係節も分詞構文も、-ingを主要部とする「同じ」節構造から派生し、最終段階での標示の投射のみが異なるという分析を提示する。

この2つの構文は、第1節で簡単に述べたように、従来は、(11a)は、主名詞 the womanに縮約関係節としての分詞entering the roomが修飾要素として付随した構文として、(11b)は付加詞(副詞)節が分詞となっている構文として分析されてきた。当該の下線部分だけを構造化するなら、概略(12)のような構造である。

- (12) a. [_{DP} the woman [_{CP} (who is) entering the room]] (縮約関係節)
b. [_{CP} (when/as) the woman (is) entering the room] (分詞構文)

これらの構造を、(7)の例と同様の「標示の投射の曖昧性」により分析するには、(i)現在分詞節の構造と解釈、(ii)縮約関係節の特徴の考察、(iii)標示の曖昧性と文全体の解釈の関係、を明らかにする必要がある。本節では (i) と (ii) を扱い、(iii)については、第5節で(7)で観察された自由関係節と間接疑問文も含めて、標示の投射の曖昧性から、どのようにどちらか一方に決定されるのか(どうして文全体では一義的に解釈されるのか)を考察する。

4.1 動名詞構文について

生成文法では、文構造は基本的には(6)の例で示したような構造と想定され

てきた。つまり、事態を表す動詞句（VP）の上部に機能範疇として、時との関わる時制辞句（TP）があり、さらにその上に文全体の機能を標示するCPを持つ構造である。この〔VP-TP-CP〕から成る3層の構造は、主文だけでなく、従属節においても想定されている。⁸

- (13) a. I think [CP that [TP Mary will [VP stay at home]]]
 b. [CP Whether [TP Mary will [VP stay at home]]] is the question.
 c. [CP Because [TP Mary [VP stayed at home]]], she did not get involved in the accident.
 d. I like the man [CP who [TP Mary [VP invited]]]

(13a)は目的節、(13b)は主語節、(13c)は副詞節、(13d)は関係節（形容詞節）であるが、どれもVP-TP-CPの構造を持つ。こうした定形節の他に、時制辞がtoの不定詞節も広く討議されてきている。不定詞のCやT要素は定形節ほど明確ではないが、補文表示forやwh-語が共起できること、toは上位節より後（未完）の時を志向するTense要素として分析できることから、不定詞も基本は〔VP-TP-CP〕構造を持つと考えられてきている。

- (14) a. I want very much [CP for [TP Mary to [VP stay at home]]]
 b. [CP When [TP PRO to [VP stay at home]]] is the question.
 c. Someone has to do something [CP (in order) for [TP Mary to [VP be allowed to stay at home]]].
 d. I need someone [CP with whom [TP PRO to [VP stay at home]]]

不定詞に比べ、分詞を用いた節についての考察・分析は一様ではない。現在分詞形の振る舞いは、不定詞ほどには明確ではないのである。現在分詞-ingは、節の中心要素として動詞の項要素を伴うとしても、動名詞として全体が明らかに名詞句として振る舞うもの(15a)、節的であってもその主語が、名詞句に特徴的な属格のもの(15b) (Poss-ing)、主語が目的格のもの(15c) (Acc-ing)、主格のもの(15d) (Nom-ing) などがある。⁹

- (15) a. We counted on [John's singing of the song at the party].
b. We counted on [{John's/ his} singing the song at the party].
c. We counted on [{John/him} singing the song at the party].
d. [{John/he} singing the song], everyong stopped talking.

これらのうち、(15a, b)は、分詞節全体が「格」を受ける項（ここではcount onの目的語）として機能していることから、全体の標示は名詞句（DP）と考えられる。ただ、その内部構造（Dの補部）は、主語Johnや、singの目的語の格のあり方により、(15a) ではNP、(15b) ではVPと分析できる。また、(15c) は、主語が目的格を持ち、それは主文の述語（count on）から例外的格付与によりTPを越えて付与されると考えるなら、分詞節全体は名詞句（DP）ではなく、節（TP）と考えられよう（Reuland 1983、Abney 1987、Suzuki 1988、鈴木 2017b、など参照）。一方、分詞構文の（15d）については、分詞節は付加詞であり、格付与を受ける位置ではないことから、Reuland（1983）は、全体をIP（TP）とし、-ingはその主要部であり、（定形時制節の T 同様）主語に主格を与えるという分析を提示している。

4.2 縮約関係節の特徴

縮約分詞関係節については、定形関係節からの縮約形（例えば（12a））のような分析が記述的には想定できるが、もう1つの定形時制を持たない関係節（(14d) のような不定詞関係節）とは明らかに性質が異なるのである。先ず、不定詞関係節だが、(13) と（14）の対比で見たように、不定詞節一般の性質として、toは時制辞Tの主要部として生起し、toには主格付与能力が欠落しているため、主語は、例外的格付与（上位のC要素for、もしくは上位の述語）により目的格を与えられないなら、PROとなる。そして、不定詞関係節は、(16) と（17）で観察できるように、定形関係節と共通する特徴（18）を示すことから、定形関係節同様、全体としてCPで、wh要素が元位置からCP指定部へwh移動すると分析できるのである。

- (16) a. [The man [for us to talk to ϕ] will be here soon.
b. We must find [someone [to whom to talk ϕ].

- c. ??The food [(for evryone) to want to believe the king to have cooked ϕ] will be served.
- (17) a. [The man [who we should talk to ϕ] will be here soon.
b. We must find [someone [to whom we can talk ϕ].
c. The food [that everyone wants to believe the king to have cooked ϕ] will be served.
- (18) a. 関係詞化される要素の位置は、格を持つ名詞句（項）、もしくは付加詞（副詞）要素である。
b. 関係節の文頭にはC要素（補文標示、Wh句）が生起できる。
c. 関係詞化される要素は従属節内に生起でき、いわゆるwh要素の長距離移動の特徴を示す。

一方、縮約関係節は、一見、(12)および(19)の縮約関係節と(20)の定形関係節を見るなら、定形関係節から、wh要素とbe動詞を省略（いわゆる「whiz 削除規則」）により関係づけられるように見える。

- (19) a. [The students staying late in the library] would pass the exam.
b. [The man being arrested] will be charged.
- (20) a. [The students who {stay/are staying} late in the library] would pass the exam.
b. [The man who was {arrested/ being arrested}] will be charged.

しかし、単純に定形関係節からの縮約では説明のつかない振る舞いが広く指摘されている（井上他（1985）など）。例えば、(21)の縮約関係節と(22)の定形関係節に示されている違いである。

- (21) a. She is talking to [a man resembling her father].
b. [A person having dealt with her] will never forget her.

- c. *The woman [(he/him/his) {inviting/having invited}] will be here.
 - d. *We will meet anyone [to whom (he/his/him) talking].
 - e. *The dish [(we/us/our) believing {that he has /him to have} cooked] will be served.
- (22) a. *She is talking to [a man who is resembling her father].
- b. *[A person who {is/was} having dealt with her] will never forget her.
 - c. The woman [who he (has) invited] will be here.
 - d. We will meet anyone [to whom he is talking].
 - e. The food [that we believe that he has cooked] will be served.

まず、(21a, b)と(22a, b)だが、定形関係節(22a, b)では、述語が(a)の resembleは状態、(b)は完了のhaveであることから、進行形の-ingは許されない。しかし対応する短縮関係節(21a, b)は正文である。つまり、縮約関係節の-ingは定形関係節の進行状態を示すbe動詞の省略から派生されるのではなく、縮約関係節の-ingはそれ独自の機能をもった構造を持つことを示している。

さらに、(21c-e)と(22c-e)の文法性の違いは、関係節の特徴(18)との関係で、興味深い。(c)の例は、縮約関係節では目的語は関係節化できないことを示しており、(d)からは、そもそも縮約関係節には関係代名詞は一切許されることが分かる。さらに、(e)では、短縮関係節は長距離の関係性を許さないのである。つまり、-ing分詞の縮約関係節は、不定詞関係節でも観察できた、関係節の特徴(18)を、全く示さないのである。分詞縮約関係節の「関係節性」が問われているのである。

文法的な(12)と(19)、(21a, b)からの一般化は、「関係節化」されているのは、分詞節の主語だけであり、主語以外が「関係節化」されることはないし、関係代名詞が生起することもないことである。

こうした事実を、素直に記述的に一般化するなら、短縮関係節はwh句移動を伴う関係節ではなく、主語付きの分詞節だが、全体として名詞句として振る舞っている、ということになる。従来この「素直で明確な」結論に至らなかったのは、第2節で概観したXバー理論が想定する構造構築の条件、および、節の基本としての定形節と不定形節の関係、つまり、不定詞節も分詞節も定形節

の「不完全形」だが「節（CPもしくはTP）」である、という想定を踏襲してきたからであろう。しかし、上記の分詞節の特徴をそのまま捉えるなら、短縮関係節は、述語とその項構造が分詞の形で表出した表現だが、全体としては上位構造で名詞句として機能する、ということになる。この一般化は、従来の枠組みでは捉えられなかったのだが、第3節の(9)-[B]で提示した構造構築（併合）と標示を分離する分析を援用するなら、無理なく捉えられる。

4.3 分析：投射する標示の曖昧性

第3節で提示した自由関係節の分析を簡単に振り返ろう。自由関係節はwh移動が伴うことから、節構造としてはCの投射を持つ。ただ、wh移動の結果は、標的のCの標示が投射される間接疑問文とは異なり、移動してきたwh句が全体の標示、つまり、DP（もしくはNP）となる。さて、縮約関係節（分詞節）だが、上記で見たように、wh移動の証拠はなく、分詞節はwh移動ができない、つまり、Cの投射を持たない構造と考えられ、このことは、Reuland（1983）が分詞節をIP（TP）構造として分析していることと重なる。

以下ではさらに、近年の節のサイズと機能についての知見も援用し、分詞節をTPよりもさらに小さいサイズのAspP節を形成すると考えたい。¹⁰ 不定詞は上記でも簡単に触れたが、toをTの主要部とするTPと分析され、不完全ながらも独自の（未完了、未実現といった）時の解釈を持つことが知られている。それに対し、分詞形は、主節の時の解釈に依存し、主節の事態時での同時性や状態性を示し、分詞独自の独立した時の解釈は馴染まない。以下の文法性の違いが、それを示している。

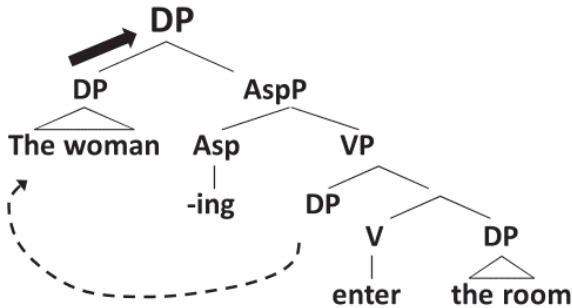
- (23) a. *I know [the woman living in this house {then/5 years ago}].
 b. I know [the woman who lived in this house {then/5 year ago}]

主文（I know）は現在時制であるが、名詞句内の事態は時の副詞が示すように、過去である。この場合、定形関係節(23b)なら問題ないが、分詞関係節(23a)は非文法的である。つまり、分詞節は、時の副詞を認可できず、主文と独立した時の解釈を持たないのである。分詞節の範疇（標示）については、分詞構文も含め、より詳細な考察が必要であるが、以下では、主文の事態との同時性を

示す範疇としてAspを想定し、-ingはその主要部と考える。¹¹

上記の考察から、縮約関係節の構造と派生は、次のように考えられる。VPはその上位構造にAsp(-ing)を持つが、VP主語がAspの投射を標的とし、その結果、主語の標示(DP)が全体の標示となるのである。つまり、(11a)を例に取るなら、分詞関係節の派生と標示は(24)と分析できる。¹²

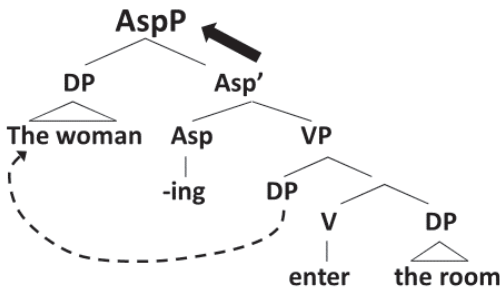
(24)



分詞関係節(24)では、wh移動を介さずに、主語DPの標示が、Aspの投射(AspP)を標的にして移動してきた段階で、投射する。それにより、構造全体がDPとなり、「分詞関係節を持つ名詞句」が派生できるわけである。

ここまでで、(11b)の分詞構文がどのように構造化され派生するか、明らかだと思われる。(24)と同じ主語DPの移動で、投射するのはDPではなく、標的の標示(Asp)の方であるなら、全体の標示がAspの投射(AspP)となる。つまり、(25)であり、これが、(11b)の分詞構文の構造である。

(25)



最後に、分詞構文の主語の格について簡単に触れておきたい。上記では Reuland (1983) の主張を簡単に紹介した。彼は、分詞構文をIP (TP) と分析し、その主要部-ingは（定形節の時制要素同様）主格を与えることができるとしている。しかし、(23)でも触れたように、現在分詞-ingによる分詞節は時制要素は持っていないと思われる。また、-ing形の動詞の主語は、(15)で見たように、他の用法では属格(15a, b)や対格(15c)で現れることはあるが、主格は許されない。主格が表れるのは分詞構文だけである。分詞構文の環境が他の動名詞節（-ing構文）と異なるのは、それが付加詞、しかも、文修飾の副詞、の環境にあり、動詞の項や名詞句内部のような、他の格が与えられる環境には生起していないことである。このことから、分詞構文の主語の主格は、分詞構文内部（-ing）で与えられるのではなく、(15c)が対格をAspP外の主文（すぐ上の文）の動詞から例外的に格付与されるのに似て、分詞構文AspPの外の主文の時制要素（TP）から付与されると考えるのが最も自然であろう。¹³

このように、Asp主要部の-ingがVPを補部とする構造から、VP指定部の主語がAsp投射を標的として併合（移動）するところまでは、縮約分詞関係節も分詞構文も同じ派生となる。違いは、併合した主語DPが構造全体の標示となれば縮約関係節、標的のAspの投射が標示となれば、分詞構文が得られる点にある。この派生により、従来の分析では捉えることのできなかった、(11)の例の類似性が説明できることになる。

5. 「標示」決定と付加詞の認可について：今後の課題

上記の分析（(9)-[B]の標示）の帰結として、構造構築（併合）の際には、併合される標的要素と併合してきた要素のどちらが標示として生き残るかについて、常に曖昧性が観察されることになる。上記の(7)の自由関係節と間接疑問文にしても、(11)の縮約関係節と分詞構文にしても、どちらの標示が採用されるかは、その構造の上位構造での解釈可能性に因る。(11)の場合は、縮約関係節(11a)では、Asp構造が主文の主語として機能しなくてはならないことから、全体の標示はDPとならなければならないが、それはVP内部から移動してきた主語（the woman）の標示が生き残ることで可能となる。一方、分詞構文(11b)では、同様のAsp構造が副詞（分詞構文）として解釈されなければならない。そのためには、主語併合の結果の標示は、標的のAspが投射され、

節 (AspP) の構造となるわけである。このことは、当該の構造が、上位構造で曖昧な解釈となる可能性があるのなら、併合されたどちらの要素の投射も許されることを予測する。実際、そのような例が観察できる。

- (26) The individual members of the society are divided into groups, each having specialized function. (中村 2009:180)

下線部分が問題の箇所だが、groupsの同格名詞句としての解釈（縮約関係節）も可能だし、理由を表す副詞節（分詞構文）の解釈も可能である。

こうした事実は、「標示」の役割が単に構造を作ることではなく、作られた構造が上位構造での意味解釈に参画するような形で認可されることにあることを明確に示しており、その点でも、第3節（3.1）の構造と標示を各々独立させた理論の方向性が妥当であることが分かる。ただ、そうだとすると、(8)で示した「標示」のメカニズムの定義からは「上位構造での役割」という「標示」本来の機能・存在意義が読み取れないことから、その役割の理論全体の中での位置づけには、更なる検討が必要だと思われる。

その観点では、併合の結果の統語構成物を解釈可能性に結びつけて「標示」を定義しているCecchetto and Donati (2015) は興味深い。

- (27) A label

- (a) can trigger further computation and
- (b) is visible from outside the syntactic object $\{\alpha, \beta\}$.

(cf. Cecchetto and Donati (2015: 2))

ただ、ここでも、外部（上位構造）でのfurther computationとvisibilityについての討議が必要なことは間違いない。それについて、上位構造の項として機能すること、PP理論での「統率」に近い構造的関係により「選択」されることが含まれるのは当然である。しかし、分詞構文については、付加詞であることから、従来の理論でも明確な構造的関係が規定されていない。上記の分詞構文の分析が正しいとすると、(27)の観点からのAspP標示の選択、および、主文の時制要素による付加詞の主語の格付与も含め、付加詞の認可を理論的に位置

づける必要がある。今後の課題である。

謝辞

本論文の一部は、日本英語学会第35回大会（於：東北大学、2017年11月18日）において発表した。参加者から有益なコメントをいただいた。また、発表に先立ち、鈴木達也氏と意見交換する機会をいただいた。感謝したい。

本稿は、井上和子先生が執筆者のおひとりでいらっしゃった1985年刊行の『名詞』での縮約関係節についての討議（本稿の4.2の内容の一部）に端を発している。井上先生については本紀要のご退任記念号（2001年第7号）や『言語研究』第152号（2017年）の追悼でも、書かせていただいたが、先生への感謝は言葉では尽くせない。偉大すぎるロールモデルでいらっしゃるが、少しでも近づけるよう今後も精進して参りたい。

注

1. (5)では、主要部の位置が補部の前に生起する英語のような主要部前置言語のものが提示してあるが、日本語のような主要部後置言語では、主要部と補部の順序は逆転し、主要部が補部に後続する。また、名詞句は理論初期では、(3c)のように限定詞Detは、NP内の指定部要素とされてきたが、現在では、機能範疇DがNPを補部とする構造が想定されており、以下では名詞句はDPとする。「標示」の詳しいメカニズムを考察するためには、DPとNPの違いも重要になるのだが、本稿ではそれには深く立ち入らない。Donati (2006)、Chomsky (2008, 2013)、Tozawa (2014, 2015)、Cecchetto and Donati (2015) など参照。
2. つまり、移動操作では、標的の標示が踏襲され、移動してきた要素の標示が投射することはない。このことは、移動が作り出す連鎖（Chain）は、Xⁿバー理論が想定する句構造のレベルに関して均質的（uniform）でなくてはならない、とする「均質性条件（Uniformity Condition）」から得られるとされている。ただ、構造構築と投射される標示について、Xⁿバー理論の想定(4)ではなく第3節で討議する方向（Donati 2006、Chomsky 2008, 2013）で考えるなら、移動先（標的）のカテゴリーがそのまま投射される必要はなくなるのである。
3. (6)は主節疑問文なので、TがCに移動（矢印（b））しているが、(7a)ではその移動は適用されていない。

4. Chomskyは、近年の古生物学や遺伝子学の知見にも言及して、この結論に達している。Chomsky (2016) では、一般向けの論考として、言語の特性から出発して、ヒトとはどういう生物か、を問い、明快な論旨を展開している。
5. Chomsky (2008, 2013) では、(i) (ii) の他に、(iii) として、「 α と β に共通する素性の集合」を標示とする可能性も示されているが、以下では (i) と (ii) についてのみ考察する。また、Cecchetto and Donati (2015) は、主文として機能する構成物については標示を持たない可能性も検討している。
6. (9)-[B]の両方向からの標示の投射の可能性については、先行研究（特に、Chomsky 2008, 2013; Tozawa 2014, 2015）では、併合する要素が主要部（H）であるか句（YP）であるかで異なることが討議されており、ここで示すほど単純ではない。そこでの定義では、「標示の生き残り・投射」は、あくまでも併合されて作られた統語構成物（SO）の内部で決定されることになる。しかし、「標示」の必要性は、SOの問題ではなく、その上位構造での解釈可能性（visible）と関わり、SO内部での決定とは異なるメカニズムが必要であろう。第5節で簡単に触れるが、その方向での考察を提示しているCecchetto and Donati (2015) は興味深い。
7. (9)-[B]の矢印で示したように、投射する標示の違いより、異なる標示をもった構造が派生できることが(7)の例で明らかになったが、同様の方向で、Tozawa (2015) は、(i) のような-everを伴う自由関係節(a)と譲歩節(b)を分析している。
 - (i) a. Stop [whatever you are doing].
b. We love you [whatever you do].そこでは、whateverをwhat (D) と-ever (Ever句) の異なる標示を持つ要素から成るとし、(ia)はwhatの標示を受けDPとして、(ib)では-everが投射するEver節として分析している。
8. TP内の主語は、(6)の構造・派生で示したように、VP内に生成され、TP指定部へ移動し主格を受ける。その過程は(13)では省略してある。
9. (15a-c) のような例については本稿では詳細に立ち入らない。Reuland (1983)、Abney (1987)、Suzuki (1988)、鈴木 (2017b) など詳しく考察されている。参照されたい。なお、(15d) のような例は以下4.3で扱う。
10. 節（文）は、その内部に表出する述語の形や副詞などにより、サイズと機能が異なるとする考え方は、生成文法ではカートグラフィの枠組み（Rizzi (1997)、Cinque (1999) など）で研究が進みつつあるが、この考え方は、例えば南の文の階層性とサイズ（南 1974）のように、むしろ日本語学の記述的考察で以前から広く想定されてきていること

を指摘しておきたい。

11. 同じ分詞でも過去分詞形は、時の解釈との共起が可能である。

(i) I know [the woman evicted from this house {then/5 years ago}]

この違いは、節の縮約形としての現在分詞と過去分詞が、節のサイズや機能の観点から異なる構造であることを示唆している。より詳細な考察が必要であるが、今後の課題とする。

12. (24)には示していないが、派生の段階で動詞enterはAspの主要部-ingへ移動し、enteringと具現する。ここで提示した分析はTozawa(2014)とほぼ重なる。Tozawaでは、標示操作について、注6で簡単に触れたが、「生き残り」の標示について考察を加えており、全体をDPとするためには、移動したthe womanのtheを更に移動させるという分析を提示している。本稿では縮約関係節と分詞構文の派生の比較が主眼だが、Tozawaでは分詞構文は扱っていない。しかし、注7で簡単に触れたようにTozawa(2015)ではwh-ever節を扱い付加詞節と自由関係節の派生と標示の曖昧性を討議しており、本稿での問題意識と重なる。また、縮約関係節については、鈴木(2017a)も参照されたい。
13. 文修飾の付加詞（副詞節）の構造的位置については、更なる考察が必要であるが、分詞構文は主文の前にも後ろにも生起できること、その時制解釈が、前述したように主文の時制と同時（主文の事態時での状態）であるか、もしくは発話時であることを考慮すると、主文のTP（もしくは、Rizzi(1997)の構造を想定するなら、TP上位のFinP）に付加（併合）する位置と考えるられる。AspPは（例外的格付与を許すTP同様）上位からの格付与をを許し、AspP内の主語が主文のT（Fin）から主格を受けるとすれば、分詞構文でのみ分詞節の主語が主格となることが説明できる。

参考文献

- Abney, Steven (1987) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Bresnan, Joan and Jane Grimshaw (1978) "The syntax of free relatives in English," *Linguistic Inquiry* 9, 331-391.
- Chomsky, Noam (2008) "On phases," in R. Freidin, C. Otero and M. Zubizarreta (eds.) *Fundamental Issues in Linguistic Theory*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2016) *What Kind of Creatures Are We?* New York: Cambridge University Press.

- Cecchetto, Carlo and Caterina Donati (2015) *(Re) labeling*. Cambridge, Mass: The MIT Press
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford University Press.
- Donati, Caterina (2006) "On wh-head movement", in L. Chen and N. Cover (eds.) *Wh Movement: Moving On*. 21-46. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 井上和子・山田洋・河野武・成田一 (1985) 『名詞：現代の英文法第6巻』 研究社出版.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店.
- 中村捷 (2009) 『実例解説英文法』 開拓社.
- Reuland, Eric (1983) "Governing -ing," *Linguistic Inquiry* 14, 101-136.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine structure of the left periphery," In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*. 281-331. Dordrecht: Kluwer.
- Suzuki, Tatsuya (1988) *The Structure of English Gerunds*. Ph.D. dissertation, University of Washington.
- 鈴木達也 (2017a) 「英語縮約関係節の構造について」『中部英文学』37号. 21-29. (『英文学研究』支部統合号10巻 (2018) 139-147. 日本英文学会にも掲載)
- 鈴木達也 (2017b) 「ACC-ingの構造について」 日本英文学会中部支部第69回大会発表資料.
- Tozawa, Takahiro (2014) "The head raising analysis of reduced relative clauses in English," 『人間科学研究』 31, 221-227. 北見工業大学.
- Tozawa, Takahiro (2015) "On labeling free relative clauses in English," *English Linguistics* 32-1, 22-58. 日本英語学会.